

## 第五福龍丸元乗組員

# 池田正穂さん(元操機手)の

# お話を聞く会

2013年11月24日(日) 13:30~

藤枝北高校 自彊館 会議室

池田さんは1954年3月1日、「ビキニ環礁」でアメリカの水爆実験に遭遇し、「死の灰」を浴びた「第五福龍丸」の乗組員23人のうち、7人のご存命の方のうちのひとり。「高校生になら語ってもいいよ」と快く引き受けてくださいました。ビキニ被災60年を前に、貴重なお話が聞けそうです。

「当時は21歳。現在80歳。爆発したときみんなは、太陽のように見えたと言ったが、僕は機関場に居たため、爆発の瞬間は見ていない。甲板に上がっていったときには真っ白な灰が甲板いっぱい降っていた。久保山さんが「何だ？これは？」となめてしまった。ビキニの方に実験地があることは知っており、原爆かもしれないという予想はたてていたが、放射能という知識はなかった。」



「エンジンにも灰が入り込み、機関場に居ると気持ちが悪くなってしまい、外に出たり入ったりしていた。なぜなのかわからなかった。船が焼津に戻るまで2週間船の上で魚を食べ、具合が悪くなった。ご飯を炊く水も海水、体を洗うのも甲板を洗うのも海水。自分はエンジンから出てくるお湯で油にまみれた手を毎日洗っていたのでまだよかったのかもしれない。港へ帰り、顔が黒くなってしまった人(外傷の酷い)2人が病院へ行った。みんな放射能のことを知らず、帰ってすぐは嫌がる人はいなかった。」

「とってきた魚は市場に並べてしまったり、親しい人に分けてしまった。その後、市場の魚は市が引き取り土に埋めた。魚の皮の部分など人間が食べないところを犬にあげていたら、3日もたらずに死んでしまった。」

「放射能のことが知れ渡ってからは、福龍丸の乗組員の店だと言われ、実家はあんこ屋さんだったが、買ったものを川に捨てられた。店は廃業に追い込まれた。魚屋も、みんなうちの魚は大丈夫ですといったよいか張り紙をしていた。しかし、ほとんどの魚屋さんがつぶれてしまった。半年くらいは悪く言われた。」

(2013年9月21日(土) 島田樟誠高校での「お話を聞く会」の記録から)

主催 エバーグリーン藤枝 問い合わせ・連絡先 橋本純 hasijun@xf7.so-net.ne.jp